０５／０８／１４　　礼拝メッセージ　　土井義広　副牧師

主　　題：あなたは何を最優先しますか？
聖書箇所：コリント人への手紙第一　９章１－１８節

あなたが一番達成したいことは何でしょう？また、あなたは何のために生き、何を最も優先しておられますか？確かに、仕事をして生きる糧を得ることは必要です。聖書の学びを通して、もっと神のことを知って行くことも大事なことです。教会でいろいろな奉仕をすることも、そして、そこで感じた疑問を解消することも必要でしょう。しかし、私たちクリスチャンが日々、最も優先し、すべてのことの指針とするべきことについて、パウロははっきり教えてくれていました。それは、Ｉコリント６章の終わりにあるように、「自分を罪から贖い出してくださった神の栄光を現わして行く」ということです。これこそがあなたにとって、いや、救われたすべてのクリスチャンにとって、最大限の関心を払って達成して行かなければならないことなのです。

☆特別な権威と自由が与えられていたパウロが最優先したものとは？

前回８章から学んでいる内容は「偶像に捧げられた肉」に関する問題です。今の私たちにとっては余り関係のないことのように思いますが、却ってそれが良いとも言えます。なぜなら、パウロはＩコリント８：８で**「しかし、私たちを神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益にはなりません。」**と教えているからです。つまり、どちらでも良いのです。しかし、そのような状況のときに何を優先し、何を選択するのかということが、パウロが当時のコリント教会のメンバーたちに伝えたかったことであり、今の私たちにも必要なことなのです。続く９節に**「ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように、気をつけなさい。」**とある通りです。

新約聖書を見て分かるように、その約半数がパウロによって書かれたことからも、パウロがいかに神によって特別に選ばれ、特別な器として用いられたかを知ることができます。しかし、そのようなパウロであっても、彼は高ぶることなく、自らを制し、大きく神に用いられました。今週と来週は、パウロと言う人物が何を考え、何を最優先して生きたかということを見て行きたいと思います。そうすることによって、私たちもパウロと同じように、より神を喜ばせ、より価値のある信仰生活を送ることができる者となって行けることを願います。

１．<u>周りへの証を最優先した。</u>　　１－１２節

１－１２節を見てください。**「9:1 私には自由がないでしょうか。私は使徒ではないのでしょうか。私は私たちの主イエスを見たのではないでしょうか。あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。:2 たとい私がほかの人々に対しては使徒でなくても、少なくともあなたがたに対しては使徒です。あなたがたは、主にあって、私が使徒であることの証印です。:3 私をさばく人たちに対して、私は次のように弁明します。:4 いったい私たちには飲み食いする権利がないのでしょうか。:5 私たちには、ほかの使徒、主の兄弟たち、ケパなどと違って、信者である妻を連れて歩く権利がないのでしょうか。:6 それともまた、私とバルナバだけには、生活のための働きをやめる権利がないのでしょうか。:7 いったい自分の費用で兵士になる者がいるでしょうか。自分でぶどう園を造りながら、その実を食べない者がいるでしょうか。羊の群れを飼いながら、その乳を飲まない者がいるでしょうか。:8 私がこんなことを言うのは、人間の考えによって言っているのでしょうか。律法も同じことを言っているではありませんか。:9 モーセの律法には、「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない。」と書いてあります。いったい神は、牛のことを気にかけておられるのでしょうか。:10 それとも、もっぱら私たちのために、こう言っておられるのでしょうか。むろん、私たちのためにこう書いてあるのです。なぜなら、耕す者が望みを持って耕し、脱穀する者が分配を受ける望みを持って仕事をするのは当然だからです。:11 もし私たちが、あなたがたに御霊のものを蒔いたのであれば、あなたがたから物質的なものを刈り取ることは行き過ぎでしょうか。:12 もし、ほかの人々が、あなたがたに対する権利にあずかっているのなら、私たちはなおさらその権利を用いてよいはずではありませんか。それなのに、私たちはこの権利を用いませんでした。かえって、すべてのことについて耐え忍んでいます。それは、キリストの福音に少しの妨げも与えまいとしてなのです。」**

パウロが様々な自由や数ある選択の中で最も優先したもの、それは周りへの「証」です。パウロにとって自分の権利や主義・主張、また損得、そのようなものより周りへの証を優先したのです。

●<u>パウロに与えられた《使徒》という地位と権利</u>　１－６節

この箇所には多くの疑問形が出て来ます。ギリシャ語の原文を見ても実に１３箇所もの疑問形が出て来ます。けれども、それらはパウロが本当に何らかの疑問を持っていたのではないことは容易に分かります。たとえば、１節の**「私には自由がないでしょうか。」**ということに関して、先に見た８：８－９や９：１２、１９**「:12 もし、ほかの人々が、あなたがたに対する権利にあずかっているのなら、私たちはなおさらその権利を用いてよいはずではありませんか。それなのに、私たちはこの権利を用いませんでした。かえって、すべてのことについて耐え忍んでいます。それは、キリストの福音に少しの妨げも与えまいとしてなのです。」「:19 私**

**はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。」**とあるように、パウロは自分にも自由が与えられている確信をもっていたことが分かります。パウロは自分の考えを強調するために、それと反対のことを疑問の形で表現する、つまり反語を使ったのです。

パウロがここで強調して言っていることは「自分にも自由と権利がある」ということです。神がクリスチャンに対して自由・権利を与えてくださったのなら、「使徒」という特別な権威を与えられたパウロには、それ以上の自由があるはずです。しかし、実際はⅠコリント１章でも見たように、コリント教会には分裂・分派があって、ある人たちはパウロに反発し、パウロを貶めようとして彼の使徒職まで攻撃していたのです（特にⅡコリント１０－１３章、Ⅰコリント１：１、４：３、９：１－２など）。ここの箇所はそのような攻撃に対するパウロの主張、弁明でもあるのです。

１節から順に見て行きますと、当然、パウロにも「自由」がありました。そして、彼は確実に「使徒」でした。彼はここで自分は使徒の資格を十分に備えていることをはっきり証明しています。その「使徒の条件」を見てみましょう。これは亡くなったイスカリオテのユダの代わりを決めるときに示された条件です。使徒１：２１－２２**「ですから、主イエスが私たちといっしょに生活された間、:22 すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、<u>いつも私たちと行動をともにした者</u>の中から、だれかひとりが、私たちとともに<u>イエスの復活の証人</u>とならなければなりません。」**、（１）イエスから直接教えを頂いた者＝**「いつも私たちと行動をともにした者」**とある通りで、これは１２弟子に権威や源があるというのではありません。パウロの場合はガラテヤ１：１１－１２にある通りです。**「兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。:12 私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。」**（２）復活後のイエスに直接会った者＝**「イエスの復活の証人」**でなければいけないのです。パウロは１節で**「私は私たちの主イエスを見た」**と語っています。復活後のイエスに直接会ったと。そのことは「使徒の働き」を書いたルカも書き記しています（使徒９：４－７、２２：１４－２１、２６：１５－１８）。ですから、もし今、キリスト教会と名のつくところで「使徒」という地位につく人物がいるなら、その教会は聖書的ではないと考えるべきです。なぜなら、今のこの時代に使徒の条件にかなう人がいるはずはないからです。

そして、パウロが使徒である証拠がもう一つあります。それは、彼の働きを通して多くの人たちに福音が伝えられ救いに導かれたことです。イエスはアナニヤに使徒９：１５－１６**「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」**と言われました。また、イエスがパウロの前に姿を現わされたとき、使徒２６：１５ｂ－１８**「…『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。:16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現われたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現われて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。:17 わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。:18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。』」**と言われました。つまり、「パウロを通して多くの人たちが救われる」というものでした。そして、コリント教会はまさしく、そのパウロの働きによって救われた者たちの集まりです。だから、パウロは９：１－２で**「…あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。:2 たとい私がほかの人々に対しては使徒でなくても、少なくともあなたがたに対しては使徒です。あなたがたは、主にあって、私が使徒であることの証印です。」**と言うのです。コリント教会の人たちはパウロの働きを直接に見て、その働きを通して救われた人たちです。彼らこそパウロが使徒であることの証明です。そのように神が預言され、その通りになったのです。

以上のように、パウロには自由も、そして、使徒という特別な権威までも与えられていました。しかし、彼が最も言いたかったことはそういうことではなく、「そのような自分であっても、それ以上に大切なこと、優先しなければならないことがある」ということです。もちろん、彼にも「飲み食いする権利」（４節）があり、他の使徒たちと同様に「結婚すること」（５節）も許されていました。その後に続く６節以降の内容は、パウロが自分の働きのためにサポートを受け取らなかったこと（実はそのことがコリント教会にパウロに対する誤解を生んでいると考えられるのですが）、しかし、自分は本来サポートを受ける権利があることを主張しているのです。６節に「バルナバ」の名が挙げられているのは、恐らくパウロと同じようにサポートを受けなかったからと考えられます。

●<u>本来なら権利を主張できる具体的な例証</u>　７－１１節

７節からパウロは分かり易いいくつかの実例を挙げることによって、自分も本来なら教会からのサポートを受ける権利が十分にあることを主張しています。（１）<u>兵士</u>＝７ａ節**「いったい自分の費用で兵士になる者がいるでしょうか。」**、彼らは当然、国や自分を雇っているところから報酬を受けます。（２）<u>ぶどう園の</u>

主＝７ｂ節**「自分でぶどう園を造りながら、その実を食べない者がいるでしょうか。」**、自分たちが作っているぶどうの実を当然食べます。（３）羊飼い＝７ｃ節**「羊の群れを飼いながら、その乳を飲まない者がいるでしょうか。」**、羊飼いもごくふつうに羊の乳を飲みます。８節に**「私がこんなことを言うのは、人間の考えによって言っているのでしょうか。律法も同じことを言っているではありませんか。」**とあるのは、このようなことは至極当然のことで、聖書（＝律法）でも同じことが教えられていると訴えているのです。ですから、その律法の実例として、（４）穀物をこなしている牛＝９ａ節**「モーセの律法には、「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない。」と書いてあります。」**、ここは申命記２５：４の引用です。**「脱穀をしている牛にくつこを掛けてはならない。」**。「くつこ」とは牛や馬がかみついたり作物を食べたりするのを防ぐために口にはめる籠で、鉄や藁縄で作るのですが、動物たちであってもその働きから受ける報酬を得て然るべきで、そのように、牛や家畜のことを気遣う以上に、人間にはもっとそのルールが適用されるはずです。そこから、（５）耕す者、（６）脱穀する者に言及しているのです。そして、１１節**「もし私たちが、あなたがたに御霊のものを蒔いたのであれば、あなたがたから物質的なものを刈り取ることは行き過ぎでしょうか。」**とあるように、今まで話してきた例証と同じように、パウロたちが人に霊的な成長を促したのであれば、その人たちからサポートを受けることは妥当のことであると訴えかけるのです。

●パウロが自分の権利を主張しなかった理由とは？　１２節

ここまで見てきてよく分かることは、パウロにはコリント教会からサポートを受ける権利があったことです。しかし、なぜ、パウロはそれを要求しなかったのでしょう？１２節にその答えがあります。**「もし、ほかの人々が、あなたがたに対する権利にあずかっているのなら、私たちはなおさらその権利を用いてよいはずではありませんか。それなのに、私たちはこの権利を用いませんでした。かえって、すべてのことについて耐え忍んでいます。それは、キリストの福音に少しの妨げも与えまいとしてなのです。」**と、キリストの福音のゆえだと言います。パウロにとっては、これこそが一番大きな関心であり、大切なことだったのです。つまり、自分が何を頼ってどのように生きるのか、また、周りがそれをどう評価し、そのことが自分の話す福音におおいをかけることにならないかと考えるのです。つまり、これは「証」です。彼にとっては「証」こそが最も大きな関心であったのです。

パウロはなぜコリント教会からサポートを受けることが良い「証」にならないと考えたのでしょう？それに関しては諸説があります。実際、パウロはピリピ教会からの献金は受け取っていました（ピリピ４章を参照してください）。いくつかの注解書を見ましたが、明確にこれと分かるような統一した見解はないようです。しかし、恐らく私が考えるのは、当時のコリント教会に問題があったからではないかということです。というのは、私たちが今まで見て来たように、当時、コリント教会の不品行の問題は未信者にも伝わっていたわけです。また、教会内には分裂、分派の問題があって、パウロはそれを厳しく非難していました。そのような教会からサポートを受けることは、パウロとしては、直接には言いにくいことだったかもしれませんが、証にならないと考えたのではないでしょうか？

しかし、いずれにせよ、パウロの最優先事項は**「キリストの福音に少しの妨げも与えまい」**ということでした。４：３でパウロは**「しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。」**と言って、コリント教会からの評価、またもっと多くの人たちから自分がどのように評価されるのかということには拘っていませんでした。彼にとっては、神の評価こそが最大の関心であり、その神の評価（＝みこころ）とは、キリストの用意してくださった救いを、少しでも多くの人たちに、良い状態で提供することだったのです。

さて、皆さんは「証」ということにパウロのようにここまで拘っておられますか？確かに、多くの方はいろいろなことに気を遣い、親切であろうとします。それは立派なことでまた、必要なことです。しかし、パウロが熱心に考えていたことは、自分自身の証を通して、すなわち、自分自身の生き方を通して、それに倣ってコリント教会の人たちにも福音を伝える者となってもらうことだったのです。私たちもいろいろな集会案内のチラシを配り、その人たちが教会に足を運んでくださるように祈ります。しかし、私たちの生き様は果たして主を信じ、主にのみ頼っている生き方でしょうか？神を、神のみこころを最優先するものでしょうか？もし、私たちがどんなに熱心に伝道し、大胆に福音を語ったとしても、私たちの生き方が神を優先しないで、この世と妥協し、いい加減に生きているなら、そのような信仰を神が用いてあなたを本当の力ある証とはしてくださらない、そのことを覚えるべきです。もし、あなたが他の人に神を伝えたいと思うなら、まず、あなたが神を第一にして、徹底的にこの神に従い続けることです。なぜなら、この神はあなたを救うためにいのちをも捨ててくださったからです。そして、今もあなたを導いて常に最善をなしてくださっているのです。もし、あなたがこの神に対する態度もいい加減なものなら、あなたが周りの人に伝えている神はその程度でしかないのです。あなたがどれほど「この神はすばらしいお方だ」と力強く話しても、周りの人たちは、あなたの神に対する態度を見ているの

です。あなたはこの神に１００％、それこそパウロのように、全身全霊をもって仕えておられますか？自分自身の自由や権利を主張して楽な生活を求めていたならきりがないのです。あなたの神に対する態度、証は、あなたに対して神がなしてくださったことに対する正当なものでしょうか？

私はときどきこのようなことを聞きます。「教会のある人につまずいた…、クリスチャンにつまずいた…、神は信じている、信仰はもっているけれど教会には行きたくない…」と。もし、それが本当なら、どうして教会に来ないのでしょう？どうして主を礼拝することを止めてしまうのでしょう？もし、何か問題があるのなら、その人と話すべきです。もし、だれかの悪意があったとしても、それはあなたとその人の問題であって、どうして自分のためにいのちを捨ててくださった神をないがしろにしてしまうのでしょう？

コリントの教会は、自分たちの権利、自分たちの自由、自分たちの特権を強く主張する傾向にありました。しかし、その結果はどうだったでしょう？もうすでに私たちは見てきました。当時のコリント教会は主を証するすばらしい教会ではなかったのです。教会内に様々な罪がはびこり、分裂、分派といった対立が表立って、教会内にあるべきはずの証をなくしてしまい、自分たち自身の平安もなくしていたのです。その一つの大きな原因は、パウロがこのコリント書で何度も訴えているように、彼らの「おごり」であり、「高ぶり」でした。私たち人間は皆弱い者で、私たちの欲望や願望というものには際限がありません。ちょうど、塩水と同じようなものです。飲めば飲むほど、そのときは満足してももっともっと欲しくなるのです。自分たちにより多くの権利や自由が与えられ、願いが叶えられると、私たちはもっとそれ以上のものを期待し要求してしまうのです。

そのようなコリント教会に、パウロが自分の身をもって伝えようとしたこと、それは、ピリピ書やエペソ書でも彼が訴えていることと同じです。そのことはまた、イエスも最後の晩餐で弟子たちに教えられたことです。それは、自分を下にして他の人のために喜んで仕えて行くことです。だから、パウロは自分の権利、特権を主張しなかったのです。それこそが、神に喜ばれることであり、神が用いられる方法なのです。